

新聞界の風雲児 曾祖父、黒岩涙香

黒岩 聖純 (下野市テレビモスクワ)
支局長、一九九一年

「もう驚いちゃったわよ。涙香さんのラブレターを見しちゃうたのよ」。細を赤らめながら、今は亡き祖母が興奮気味に話していたのを思い出す。それは黒岩涙香の後妻、寿賀の遺灰を、蔵食していた木箱から骨董へ移そうとした際、木箱の中から見つかった。「栄華」の名で赤坂の花柳界の芸妓として活躍していた私の曾祖母、寿賀は、涙香からの手紙を自分の最期を運ぶこととなる病床の布団の下に、いつもそっと忍ばせていた。夫の死後二十三年間も肌身離さなかった、人生で最も大切な宝だったのだ。書かれて

あったのは――

「雪に伏したる 小枝に問へば

やがて花さく 春が来る

最愛の寿賀へ

四十一年十二月 涙香

前妻との離婚後に再婚を約束した涙香からの恋文だった。ロマンティストの涙香の一面を垣間見してしまった親族の間で、しばらく話題となった。

私が、三代前の祖先「黒岩涙香」の存在を意識し始めたのは、小学校高学年の頃だった。明治の新聞界を牽引した一人としてではなく、夜な夜な自分が読みふけた小説「レ・ミゼラブル」(ああ無情)の翻訳者としてである。題名に「ああ」という感嘆詞をつけてしまうと、なんて奇抜な発想の翻訳者なんだらうと、子どもながらにその斬新さに驚いた。さらに、「モンテ・クリスト伯」を「嵐皇王」と名付けた題名にも惹かれ、小説のページを夢中にめくり続けたのを思い出す。

涙香の名前の変遷にも興味を惹かれた。「黒岩潤六」という本名を、二十

歳前後のとき自ら改名し「黒岩大」と名乗っていた。その後、「涙の香り」と書いて、「涙香」と読ませてしまうのだから、実にキザな人だったに違いない。身内からすると、ちょっと照れくさくもなる。

今年、「黒岩涙香没後一〇〇年」を迎える。涙香は、福澤諭吉が慶應義塾を率いていた同時代に、この学校に在籍していた。その一〇〇年以上後に、私自身も同じ大学に通うこととなり、今から三十年ほど前の学生時代、三田の演説館をのぞいたことがあった。涙香が都内各所で熱弁をふるっていたから、ここ三田でも演説をしていたのだろうか、と思いを馳せた。その黒岩涙香とは、一体どんな人物だったのだろうか。

「東京一の販売部数を誇った新聞社『真朝報』の創設者」「日本の探偵小説の元祖」「海外文学を日本に紹介した翻訳者」「競技かるたの考案者」……などなど、実に多くの肩書きをもっていた。

そんな涙香の足跡を追ってみたいという思いで、就職して間もない頃、涙香の生まれ故郷・高知県安芸市へと足を運んでみた。高知市から電車で一時間ほど、安芸市の駅に降り立ち、人通りの少ない田舎道を歩き始めると、たちまち三六〇度空が見渡せ、視界が開ける。「黒岩大」と改名した思いが、ふと伝わってきた。この土地から「東京へ出て羽ばたきたい」「自分の能力を試してみたい」と。

昨年出版された評伝「黒岩涙香」(奥武田、ミネルヴァ書房)の中で、涙香の言葉が目にとまった。「断じて利の為には非ざるなり」。ジャーナリズムは決して「利」を求めるときにあるわけではない。利を求めて報道してはならないというジャーナリストの心意気である。販売部数欲しさに、あの手この手を駆使して読者をつかもうとする他紙の動向を横目に、自戒を込めた言葉だったに違いない。

今、私がおくテレビ報道の現場でも、視聴率を意識しながら、伝える

べき内容との間で起る葛藤は常にある。プレッシャーの中で、先輩や同志の人生が目の前で押しつぶされていったこともあった。涙香の言葉が、この時代にも自分の胸に突き刺さる。政治家のスキャンダルに、一度くらいついたら嫌さない。「まむしの周六」の異名をもった涙香。権力と闘い、拘束されてもおお権力への批判を緩めなかった。先祖が残した一〇〇年前の理念「断じて利の為には非ざるなり」。今なお視聴率競争の中で、もがいている自分を奮い立たせる。

チーム慶應として ヨット部優勝に思う

篠崎 正雄 (三田ヨット部副部長
会員、一九七五年)

「歴史的快挙！ 全日本インカレ総合優勝慶應大」、令和元年十一月四日、

ウェブ上に通報が出ました。慶應義塾体育会ヨット部は第八回全日本学生ヨット選手権に於いてスナイプ級クラス五位入賞、四七〇級クラス優勝、総合優勝をおさめ日本一の座に就きました。昭和二十七年以来の快挙です。

今から六十七年前、「完全優勝の昭和二十七年」に、当時の主将武田寛が以下のように語っています。「河本文彦監督、高橋マナージャーの努力で新船を購入し、一年下の石井正行、高原照男、櫻町三郎は実力を備え何ら心配がなかった(石井正行、櫻町三郎は昭和三十九年東京オリンピック代表)。自分の代は九名の同期が練習熱心だったが、選手は四名に絞り、残り五名は緑の下力持ちとなるべく努力し盛り立て、部の運営に絶大な力となったことだ」。

「チームとして」マナージメントされ総合力で完全優勝に繋がったことが確認できます。東京オリンピックで日本チーム主将を務めた櫻町三郎は後に以下のように振り返っています。「昭